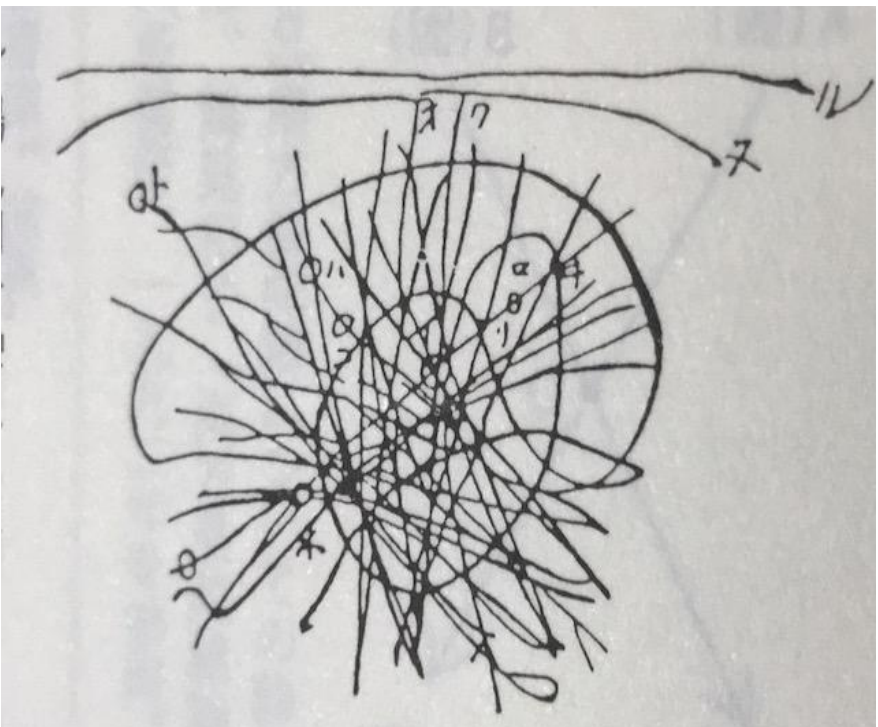


『始原の俳句―兜太・芭蕉そして空海について』

資料



前衛とふ始原の眼花ひらく

野崎憲子

木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ

加藤楸邨

1 「いのちの空間」について

金子兜太第十三句集『東国抄』より

おおかみに螢が一つ付いていた

おおかみを龍神りゅうじんと呼ぶ山の民

狼に転がり墜ちた岩の音

狼生く無時間を生きて咆哮

山鳴りときに狼そのものであつた

月光に赤裸裸な狼と出会う

ニホンオオカミ山頂を行く灰白なり

ウル
原植物

ウル おおかみ
原狼

金子兜太著『俳句専念』ちくま新書

万物の霊長を自覚した人間という生きものが、生を謳歌しその分死を怖れて、

時間が作られ増長していった、ともいえる。いまでは、人間は、自分で作った時間に振り回されている。それによって、死を早めてさえいる。わたしは、この時間意識を越えて、「狼の生の空間」を自分のなかに獲得したい、と願うようになったのです。「生そのものである生」の獲得。その限りない「自在さ」、ゲダンゲン・リリク（思想的抒情詩＝思想詩）

墓地も焼跡蟬肉片のごと樹々に

『少年』

原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ

『少年』

彎曲し火傷し爆心地のマラソン

『金子兜太句集』

金子兜太第十五句集『百年』朔出版

秩父盆地皆野小学校はわが母校、そこを訪ねて尿瓶を語る

後輩と尿瓶に冬のひかりかな

小学六年尿瓶とわれを見くらぶる

山枯れて女子小学生尿瓶覗く

小学生尿瓶透かして枯山見る

われの尿瓶を嗅ぎ捨てにして無礼かな

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子

『少年』

山峡に沢蟹の華微かなり

『早春展墓』

暗黒や関東平野に火事一つ

『暗緑地誌』

ANKOKUYAKANTOUHEIYANIKAJIHITOTU
暗黒や関東平野に火事一つ

2 「幻の巷」 ちまた

「芭蕉全句（上・中・下）」加藤楸邨著ちくま学芸文庫

道の辺の木槿は馬に食はれけり

山路来て何やらゆかし董草

よく見れば薺花咲く垣根かな

古池や蛙飛び込む水の音

行春や鳥啼き魚の目は泪

田一枚植ゑて立去る柳かな

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

雲の峰幾つ崩れて月の山

荒海や佐渡に横たふ天の河

あかあかと日はつれなくも秋の風

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

3 「曼荼羅」について

紀元前千年〜千五百年頃成立したインド最古のバラモン聖典『リグ・ヴェーダ』のなかで〈卷〉を意味する語として使われていました。

『秘密曼荼羅十住心論』（空海著）、彼は意図的に「真言」の梵語を「マントラ」から「マンダラ」に変更したと記されています。

曼荼羅図には、異宗教の神々も圧縮し内在されています。そしてその真ん中では大日如来が曼荼羅宇宙の、すべてを包み込んでいます。

五大に皆響き有り

十界に言語を具す

六塵ろくじん 悉く文字なり

法身は是れ実相なり

『声字実相義』

五種の存在要素(即ち、五大)には、みな響きがある。

十種の世界(即ち、十界)は、言葉をもっている。六種の認識対象(即ち、六塵)は、ことごとく文字である。さとの当体(即ち、法身)とは、実相のことである。(五大)とは、地・水・火・風・空。全宇宙を構成している五つの物質をいいます。(十界)とは、仏の世界・菩薩の世界・縁覚の世界・声聞の世界・天界・人間界・阿修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界。地獄から仏性を開顕する最高の悟りの世界までが混在している心の縮図を表す。(六塵)とは、色塵(色)・声塵(声)・香塵(匂い)・味塵(味)・触塵(触る)・法塵(思想)。認識作用の対象となるものを示しています。つまり大宇宙の一切が真理を語っており、その一つ一つが、五大に響きありの曼荼羅の世界なのです。

表紙絵は南方曼陀羅

飯倉照平・長谷川興蔵篇『南方熊楠

土官法竜

往復書簡』八坂書房

一九九〇年刊行 三〇八ページ

鶴見和子著『南方熊楠・萃点の思想』藤原書店、に拠りますと、「熊楠は、すべて

の現象が一カ所に集まることはないが、いくつかの自然原理が必然性と偶然性の両面からクロスしあって、多くの物事を一度に知ることの出来る萃点が存在する」

萃点は大野夏星兜太熊楠

中村ヨシオ句集『天田屋文エ門』

「自己の身を置く環境がどんなに激動しようとも、その底にあって、自らの激動を見つめてゐる無限に静寂な『颱風眼』これこそが私が切に俳句に望んでやまぬ俳句眼である。」 加藤楸邨

4 「真相」について

俳誌「寒雷」昭和十六年七月号

万象そのものが無くてはならぬ姿は、日常の目には、覆いかくされている、この覆いをつきぬけて万象の真のあらはれの微を感じ、ここから真相に滲透しなければならぬ。・・・真の写生・真の抒情は、この中にのみある。自然の人間滲透であり、人間の自然滲透である。これこそ東洋的把握の中核であり、俳句的把握の正しき伝統である。

加藤楸邨

付記

一切の世界は、一つの陀羅尼の中に、あるいは一つの梵字に集約される

『吽字義』
うんじぎ

真言密教の正嫡は、びるしゃな 毘盧遮那(大日如来)→こんごうざつた 金剛薩埵→りゅうみょう 龍猛(龍樹)→りゅうじゆ 龍智→けいか 金剛智→不空→けいか 惠果→空海

「この心理の花園に入るには、どうしたらよいか。懺悔が、至心の懺悔が必要なのだ。まず、自らの心を、清浄、無垢にしない限り、この心理の花園に入ることはできない。この至心の懺悔に感じて、金剛神が出てくる。お前は何のために来たのか、りゅうみょう 龍猛は、真理発見のための熱い意志を語る。こうして、龍猛は塔内に入り、塔を見る。この塔こそ、毘盧遮那如来の心理がいつぱいつまった塔である。多くの仏たちは、その塔の中で自由自在に遊び戯れている。この遊びたわむれる仏たちの前で、龍猛はかのこんごうざつた 金剛薩埵から灌頂をうけ、秘密の法を伝授されるのである」

『空海の思想について』梅原猛著講談社学術文庫

密眼 ↓ 萃点 ↓ 颱風眼 ↓ 始原の眼